

書 評

Norma Field, *In The Realm of A Dying Emperor*, Pantheon Books, New York, 1991.

(和訳はノーマ・フィールド『天皇の逝く国で』、大島かおり訳、みすず書房、一九九四年)

原 武 史

Norma Field, *In The Realm of A Dying Emperor*, Pantheon Books, New York, 1991.

361

いまから十年前の一九八七（昭和六十二）年九月、朝日新聞朝刊に突如として躍り出た「天皇陛下 腸のご病氣」のスクープが、日本全国を電撃のように走った。八十六歳と高齢だったにもかかわらず、いたって元気で、その月には全国の都道府県でただ一つ行ったことのなかった沖縄県で国体（国民体育大会）が開かれるのを機に、この最後の県を訪問することになっていた昭和天皇が、内臓に重大な疾患を抱えていたというのだ。沖縄訪問はすぐに中止となり、「玉体」にメスを入れるという、史上空前の手術が一級の医師の手を通して行われた結果、天皇はその後しばらく、小康状態を保った。⁽¹⁾だがその一年後の一九八八年九月には、天皇は再び大量に吐血して容体が急変、一九八九年一月七日に死去した。元号は昭和から平成と改められ、その翌月には昭和天皇の葬式に当たる「大葬の礼」が、一六四カ国の代表を集めて皇居で行われた。

多くの日本人は、この間のさまざまな「自粛」の動きや、天皇が死去したその日の皇居前広場での人々の反応、また昭和から平成へと移り変わったことを知らせるためにマスコミが流した数多くの特別番組について、いまなお記憶しているにちがいない。しかし、この昭和天皇の存在と根底で深くつながりながら、同じ時期に起こった三つの「事件」——一九八七年九月の沖縄県での国体に際して、知花昌一が会場の日の丸の旗を焼いたこと。一九八八年六月の最高裁判決で、自衛隊員の亡夫が神道神社に合祀されたのは違憲だと主張してきた中谷康子が敗訴したこと。一九八八年十二月の長崎市の定例議会で、市長の本島等が天皇に戦争責任があると発言したこと——については、果たして記憶している人はどれだけいるだろうか。本書は、いまでは忘れられつつあるこれら三人の「例外者」と、アメリカ人を父に、日本人を母にもつもう一人の「例外者」である著者との対話を重要な構成要素としつつ、同時代の日本の政治、社会状況をそうした視点から鮮やかに照射したものである。

はじめに断っておくが、本書はいわゆる学術論文ではない。著者の言葉を借りれば、「時間の無関心さと空間の敵意にあらがいつつ証言をのこすべく、私の学習と想像力のプロセスをしるした文章」(三七頁。引用の頁数はみずす書房版和訳本による。以下同じ)ということになる。したがって、通常の学術論文の書評でよく見られるような、概念枠組みが間違っているとか、ここの資料の読み方が不正確だとかいう類いの批判をするのは、本書では適当でない。その代わりに以下では、本書の特徴といえるべき点や、評者も含めた日本人の天皇制研究者にとって、本書が特に示唆を与えていると思われる点などについて、述べてゆくことにする。

本書を読んだ者ならば誰しも気づくだろうが、本書はどのページをめくっても、通常の学術論文には決して見られないような感性のしなやかさと、深さと、穏やかさをたたえた文章に出会うことができる。そこには時に、自ら

の考えと同じくする者がそこにいるという著者の静かな喜びを、また時には、自らの考えとは微妙に違いながらも、その信念に対して敬意を表そうとする著者の寛容な精神を読み取ることすらできる。日本の生硬な学術論文の文体に慣れている評者、学者の本分は論文を書くことにあるのであり、エッセイを書くことではないと教えられてきた評者にとって、シカゴ大学で日本文化や日本近代文学を講じるれっきとした学者である著者の、息遣いまでが伝わってきそうな生き生きとした文章は、一種の驚異である。もともと評者は、大島かおり氏の卓抜な翻訳を通してしか本書を読んでいないのだが、この思いはおそらく、原文を読んでも変わることがないだろう。

しかし本書の冒頭にあるのは、著者自身の文章ではなく、在日朝鮮人のチョン・チュウォル（宗秋月）が一九八八年十月に発表した、「哀のパラドックス」と題する詩である。著者が最後に、「これらのエッセイは、あの長びく死が書かせた一篇の詩、この本の冒頭に掲げた詩との偶然の出会いから始まった」（三三三頁）と述べているように、この三頁にすぎない短い文章は、実は本書にとって「とくべつな地位」（vi頁）を占めており、本書全体の通奏低音というべき役割を担っている。その内容を一言でいえば、戦前は「現人神」として、また戦後は「象徴天皇」として、その人間性を剝奪されてきた昭和天皇が、死の淵をさまよういまこのときになって、皮肉にも日々の報道を通して生身の人間であることが誰の目にも明らかになったことを述べるとともに、「君、死にたもうことなかれ今しばしば」、すなわち、その生身の人間として意識された天皇が、もうしばらく生きながらえることを望んだものである。

著者はこの詩に、惜しめない共感を寄せる。チョン・チュウォルがあぶり出して見せた戦前、戦後の天皇の姿——それは取りも直さず、この社会で生きてきたほとんどの日本人そのものの姿でもあるのであり、それこそ死

に瀕するような限界状況でも訪れない限り、大概の日本人は、きわめてよく整えられた秩序に順応し、画一化された規律に素直に従い、周囲との調和を保ちながら生きてゆく。そこでは、この圧倒的な体制に抗して「異」を唱えることで、自らの生身の人間性を表出することができるとような機会や場は、はじめから与えられていないのである。体制のアウトサイダーとしてのチョン・チュウォルの姿を自分と重ね合わせた著者は、次なるステップとして、同じくこの体制に「異」を唱え、生身の人間としての姿をあらわにしたことで、突然「例外者」になってしまった先の三人との出会いの旅を重ねてゆく。

その舞台は、知花昌一が登場するI章では、彼の経営するスーパー・マーケットのある沖縄の読谷村であり、山谷康子が登場するII章では、彼女の住んでいる山口と、彼女が夫とかつて住んでいた盛岡であり、本島等が登場するIII章では、彼が市長を務め、著者の叔母が住んでもいる長崎である。著者は、東京から日本の北へ、西へ、さらには南へと向かうそれぞれの旅を通して、「国旗」や「国歌」に象徴されるネーションとしての日本ではなく、四季折々の豊かな自然に恵まれた「ふるさと」としての日本に対する限らない愛着——その反対に、新幹線やリゾート施設、臨海コンビナートなどに代表されるような、その自然を破壊し、乱開発をおおってきた「文明」に対する限らない嫌悪——を表明するとともに、この三人を中心とする人々の思想や信条が、どのような風土や生活環境から育まれてきたのかを見事に浮き彫りにしている。

すなわち、知花昌一の場合は、自宅の近くにある「チビチリガマ」と呼ばれる穴の中で戦争中に起こった集団自決に代表される沖縄戦の記憶と、その記憶を正しく受け継ぎ、歴史への責任を果たしていこうとする彼を支える家族、さらにはその家族をも含めた読谷村という、「日本中でただひとつ、戦争の終結が全土にもたらすはずだった

民主主義を實現しようと努力してきた」(一一八頁) 地域共同体の存在が、中谷康子の場合は、キリスト教の信仰と、彼女が最も心のより所とする教会の中にすら、組織の圧力を敏感に嗅ぎ取ることができるような、「日常的行爲のなかにひそむ抽象的禁圧を見逃さない性分、常識の専横を感じとる能力」(一三二頁) が、そして本島等の場合は、やはり五島列島の隠れキリシタンの血を引く、生まれながらのキリスト教の信仰が、それぞれ重要な背景として描かれている。もちろん、国体会場で日の丸の旗を焼き捨てた知花と、「ぼくはいのちがけで、日の丸の旗を世界に受けいれてもらえるようなものにしたかった」(三〇八頁) と発言する本島とでは、日の丸の位置付けをめぐって考え方が明らかに異なる。にもかかわらず三人の間には、一つの共通の思想的立場があることを著者は見逃さない。彼らの生身の人間としての日常生活が、すぐれた文章を通して余すところなく明かされることで、著者自身「なんと窮屈なところか」(三二〇頁) と漏らしたところの同時代の日本の状況が、鮮やかに逆照射されているのである。

著者の豊かな人間性は、その文章の至るところから見いだすことができるが、とりわけ評者には、沖縄から戻ってからの東京や、叔母を乗せた長崎でのタクシー運転手とのさりげない会話や、本島等に「家へ帰るのにお金は足りますか」と尋ねられたという長崎での著者の服装などが印象に残った。こうした小さなエピソードは、けれども味がなく、いかにも自然であり、本書全体のストーリーの中にすんなり溶け込んでいる。それはまさに著者の持ち味であり、飾らない文体にも反映している。

現在の日本の天皇制研究にとって、決定的に欠けているのは何かを図らずも明らかにしたことも、本書の功績である。それは一言でいえば、学校教育で養われた知識をもとに、難解な資料や論文を読みこなす“ハード”な能力

ではなく、人の心に食い込むようなしなやかな感性をもちながら、時代の状況を鋭く見抜く「ソフト」な能力のことである。往々にしてそれは、ジャーナリストイックであるという批判から免れないが、一九四五年に書かれた丸山真男の「超国家主義の論理と心理」をあげるまでもなく、場合によっては、後者は前者よりも多くの学問的成果をもたらすばかりか、後々まで長く読み継がれる「古典」を生み出す可能性すら有している。本書は間違いなく、このような学問の世界における「古典」の一つとなる資格を備えている。

ただ問題は、著者が照射して見せた今日の日本の状況が、いったいどこから来たのかということである。「天皇だけに、もしくは知識人ならもつと慎みぶかく天皇制と表現するものだけに、今日の日本の状況の責任があると言っているのではない」(三二頁)ことを著者は明言するが、それ以上は深く追究していない。だがこのやっかいな問題は、著者だけでなく、「ハード」な研究を得意とする日本の研究者全員が課題としなければならないものなのである。⁽²⁾

△注▽

(1) 蛇足だが、評者はこの時期、『日本経済新聞』の社会部記者として、宮内庁詰めになり、天皇の診察を担当する侍医の家に連日深夜まで張り込んだ経験がある。もちろん天皇の容体が急変することはしばらくはないのだが、日本のマスコミ界では、他の新聞、通信社やテレビ局が張り込みをしているのに、自分の社だけがそれをしないのは、万一の場合取材に乗り遅れることになるという呪縛から逃れることができず、結果として膨大な時間を無駄に消費することになる。連日の張り込みの結果、過労がたたって天皇よりも先に死に追い込まれた記者もいたことは、意外に知られていない。

(2) それが少なくとも、近代天皇制の開始時点である明治ではなく、天皇が京都の御所に事実上の幽閉状態にあった江戸時代にま

でさかのぼることは、当時の大名行列や朝鮮通信使を迎える人々のきわめて統制された秩序から明らかである。この点に関して
は、拙著『直訴と王権——朝鮮・日本の「二君万民」思想史』（朝日新聞社、一九九六年）八八―一四頁を参照。

〈後注〉

この書評論文は、評者が二年前まで勤務していた東京大学社会科学研究所に付属する日本社会研究情報センターが刊行する英文雑誌、*Social Science Japan Review* の第二号に掲載する予定の英文の原日本文である。*Social Science Japan Review* は、外国人を含む研究者による日本の社会科学に関する単行本の書評雑誌として企画されたが、諸般の事情から刊行が立ち遅れており、一九九七年六月現在、まだ創刊号が出ていない。そこで前もって、日本語の文章の方を公表することにすべく、関係者の了解を得た次第である。もともと外国人の研究者を読者に想定して書かれた文章であることを承知されたい。なお一言付け加えれば、著者の姓 Field を和訳すれば「原」となり、評者と同じになる。評者が著者に親近感を覚えるのは、この辺りに理由があるのかもしれない。